

幼稚園における自閉症への教育的支援の実際

—集団生活の中で適応していくための環境・かかわりについて—

香芝市立下田幼稚園 教諭 岩村 晴子

Iwamura Haruko

要 旨

自閉症の基本的な特徴は、他者との相互的なかかわりをもつことの困難、コミュニケーションの困難、反復的で常同的な興味・行動という3点にある。幼児期はその特徴が顕著に表れる時期であるといわれている。そのような自閉症の子どもが、教員や友達とともに安心して、楽しく幼稚園の生活を送ることができるための環境や人とのかかわり方などについて具体的な支援の内容や方法を探る。

キーワード： 自閉症、保育環境、保育内容

1 はじめに

4歳児クラスから幼稚園に入園したA児は、集団経験が初めてということもあり、新しい環境に慣れるまでに時間を要した。しかし、毎日の生活の中で身の回りのことを自分で行ったり、リズム・表現活動がとても好きで、積極的に楽しんだり、自分の好きな遊びを見付けたり、活発に活動する姿がみられた。一方で、自分の遊びに集中すると、一人の世界で長い間遊んでいたりと、普段の生活の流れが少し変わると不安な様子を見せたり、ゲームなどで負けることをとても強く嫌がったりすることもあった。このような実態を踏まえ、友達とのかかわりや様々な遊びを通してA児が集団に目を向け、適応していくための支援の在り方を考えていくことにした。

2 研究目的

幼稚園に在籍する自閉症児の具体的な支援の在り方を研究する。

3 研究方法

- (1) A児の実態を園での様子、専門機関の受診、検査によりの確に把握する。
- (2) 指導計画の作成について考える。
- (3) 視覚的援助としての保育環境を考える。
- (4) 集団の中での育ちを意識した保育内容を考える。
- (5) 小学校との連携を図るための方途を考える。

4 研究内容

- (1) 園の概要とA児の実態

ア 園の概要

- (7) 園児数 4歳児—2クラス—計40名 5歳児—2クラス—計51名

(イ) クラスの実態

昨年度と同じクラスの1/3の幼児と共に進級する。全体に明るい幼児が多く、毎日自分が思ったことや感じたことを友達や教員に伝えながら元気よく遊んでいる。友達が困っているときなど、声をかけ合い助け合う姿がみられる。

イ A児の実態

(ア) A児の園での様子

- a 生活面はマイペースなどところがあるが、ほぼ自立している。生活の流れが普段と違うと戸惑って次に進みにくいこともある。
- b 友達が話しかけても興味がないと目を向けなかったり、進んで友達とのかかわりをもたなかったりする。しかし、自分の興味があることには友達に要求をしてかかわる姿がみられる。
- c 入園当初から数字や文字（平仮名）にとっても興味があった。今は、漢字にも興味をもっている。部屋の中のカレンダーや絵本、また廊下にある表示やクラスのお便り等を読んでいる。昨年同じクラスではなかった友達の名前を名札の文字を頼りに覚え、一学期後半から名前を呼ぶようになってきた。
- d 視線は合わないが教員の指示はほぼ聞いて行動することができる。
- e 製作や絵画活動ではイメージをもって意欲的に取り組む姿がある。リズム表現活動では、音楽に合わせてのびのびと体を動かして楽しんでいる。
- f ジャンケンが大好きだが、勝負に負けると大泣きして次の活動に進めないことが多い。そういう場合は、教員の働きかけで気持ちを立て直している。また、ドッジボールでボールを当てられると、気持ちが落ち込み泣いてしまうこともある。
- g 迷路遊びでジャンプしたときにタンバリンに手が届かないと怒って次に進むのに時間がかかるなど、様々な場面で、できる、できないにとっても敏感である。

(イ) 発達検査等による実態

a 新版K式発達検査2001：社会福祉法人 香芝市社会福祉協議会

児童デイサービス事業所ひまわり園（2003年実施）

- ・運動、認知、言語、社会の領域は平均すると年齢相応であり、順調に発達している。
- ・検査中、興味のあるものはしっかり聞くことができているが、興味のないときは自分の世界に入ってしまうので、集団の中では支援が必要であると思われる。

b K I D S乳幼児発達スケールTタイプ：幼稚園（2005年実施）

- ・操作面ではかなりしっかりとした力を付けてきている。
- ・「概念」や「対子どものかかわり」については、これから様々な経験を通して身に付けていくことが必要だと考えられる。

(2) 指導計画の作成

ア 学期ごとの指導計画

学期のはじめに、A児の姿（基本的生活習慣・対人関係・身体活動・言語理解・情緒・遊び等）を項目に分けて、そこから導き出される課題、援助、遊びの内容、教材を記述したものを作成したが、その際、保護者と共に指導計画を検討する時間を持ち、願いや思いに配慮しながら作業を進めた。

イ 個人記録

クラスの主担任は次週案の具体的な活動内容を加配副担任に知らせ、A児がその活動でどのよ

うに行動するのか、どこでつまづくのかを予想し、どのようなかかわりがよいのかを話し合っている。毎日のA児の様子を予想した姿と比較しながら、ねらい、活動及びA児の様子、教員の援助と配慮、反省と考察の項目に分けて個人記録をとっている。

ウ 日案

行事等があるときは、一日の流れに沿って、A児の行動や姿を予測して、援助や配慮を記入した日案を作成している。

(3) 視覚的援助としての保育環境

ア 生活の場面

生活面はほぼ自立しているが、手を洗うときに遊んでしまったり、椅子に座っているときに姿勢を保ちづらかったりしたので、下のような表示を作成した。また、図にはないが、昼食を早く一番に食べることがよいと思い、急いで食べてしまうので、部屋の掛け時計の数字に印を付けて、A児にこの時間までに昼食を食べ終わったらよいことを示すようにもした。



図1 手の洗い方(よこ)

○手の洗い方の表示

絵を目で追いながら、見通しをもって手を洗えるようにする(図1)。

○手本となる姿の表示

よい例・よくない例を示し、座り方を意識するようにする(図3)。



図2 手の洗い方(たて)

※洗い方の流れが分かりやすいように、表示を上から下のものに変える(図2)。

→時折、手洗い場で遊んでしまうことがあったが、左のような「手の洗い方」の表示をみせながら、何番までできたかに気付かせ、かかるとタオルで手をふくところまでの見通しをもち、手を洗うことができた。



図3 椅子の座り方

→「ぼくは、はなこちゃんいや。」と抵抗を示す姿がみられていたが、「たろうくんみたいにかっこよく座っているね。」など、声をかけていくと、とても嬉しそうな表情をみせて、話を聞く姿勢がよくなる日が増えてきた。

○ポンプを押す回数の表示

ポンプを押すことが楽しいという様子がみられたため、適量を使う意識をもてるよう、ハンドソープを押す回数を数字で示す(図4)。



図4 ハンドソープの使い方

→「一回!」とポンプの数字をみて自分からハンドソープのポンプを押していた。ポンプをたくさん押して遊ぶことはなくなった。

イ 遊びの場面

(7) 遊びの様子を絵で示す

登園後の自発的活動では、自分の好きな遊びを楽しむ姿がみられた。自分の世界に入ってしまうと友達とのかかわりが少なくなり、教員が働きかけることで周りの友達の遊びによりよく目を向けられるようになった。朝の遊びで発見したことや困ったこと、楽しかったことなどを出し合い、明日の遊びにつなげていく話し合いを図のような絵を使いながら、毎日クラス全体で行うと自分の興味のないものにも集中して、耳を傾ける様子がみられた（図5）。

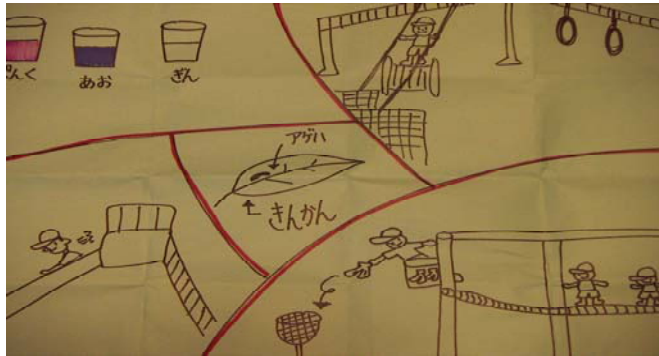


図5 朝の話合いで使う絵（例）

○クラス全体の話合いでは、画用紙に絵を描きながら進めていくようにした。

→A児にとっては自由遊びのイメージをもちやすくなり、教員を意識的にみる姿が増え、自分がしていた遊びをみんなの中で喜んで発表したり、自分がしていた遊び以外にも目を向けたりする様子がみられた。図は、朝の自由遊びの様子を描いたもの。

(1) 流れの表示を見せる

合奏の練習時、小太鼓を叩くことにととてもはりきるA児であった。3番まである曲に合わせて合奏をするが、2番のみ歌入りのダンスをすることに変更したところ、「歌いらん」「合奏する」と2番にいれたダンスが気に入らず、合奏をしたい様子がみられた。働きかけとして①合奏②歌③合奏と絵を加えた流れを示した（図6）。



図6 合奏の順序を示した絵

○A児に予告なしに合奏の順序を変更すると、気持ちが不安になるため、A児の目の前で合奏の流れを描いて見せた。

→気持ちの整理ができたようで、納得して合奏に参加することができた。

(4) 集団の中での育ちを意識した保育内容

ア 勝ち負けへのこだわり

ジャンケン列車などのゲーム遊びは好きなので喜んで参加できるが、4月当初はジャンケンに負けると「お家に帰る!」「トイレに行く!」と言って大泣きし、遊びが中断することがあった。「次は勝てるといいね。」「悔しかったね。」とA児の気持ちを代弁していった。また、A児の気持ちに寄り添って励ましたり、気持ちを立て直せるように働きかけたりすると、少しずつ気持ちを切り換えることができた。泣くことなく気持ちを切り換えることができたときには、思いきり認め、褒めるようにするととても嬉しそうな笑顔で遊び続けることができた。

また、ルールを「負けた人が勝ち」などと変えて進めてみた。負けるが勝ちだと、嫌がる姿はなく、最後まで楽しむことができた。このように少し遊びに変化をもたせると、気持ちの持ち方が変わるようだった。

クラスみんなにA児の気持ちを理解してほしかったため、機会をみて、ジャンケンで負けたときの気持ちをクラス全体で話し合った。その中で、A児が「お家に帰る」「トイレに行く」と言っているが、本当はとても悔しい気持ちがあるということを伝えた。A児が自分たちとは違う言葉を使ってしまうことを知り、同じような場面があると、「Aちゃん悔しかったね」「次、頑張ろう」とA児に気持ちを言葉で伝え、気持ちに寄り添おうと声をかけることが増えた。A児も友達に励まされることで気持ちを切り換えることができるようなときもあった。

6月初旬、保育室で「へび鬼」をしたところ、最後に鬼にタッチされてしまった。初めて自ら「タッチされちゃった。悔しいよ。」と自分の気持ちを言葉で表すことができた。教員は、気持ちを言葉で表すことができたことを褒め、悔しかったという気持ちも十分に受け止めた。クラスの幼児からも「Aちゃん悔しいって言えたな！」という言葉も出てみんな嬉ぶ日となった。

イ 友達とのかかわり

登園時、友達が教室で何かを見付けみていると「うわ～〇〇だ！」と言って室内に入ることや、給食時に「しりとりしよう！」と自ら友達に声をかけることもあるが、自分の遊びに没頭すると周りに友達がいてもかかわりがみられないことが多い。そのようなときは、次の図にあるように囲いのある空間を利用して教員がかかわりをもてるように働きかけている（図7）。



- 保育室に囲いのあるお家をつくる。
- 友達とごっこ遊びや、絵本を見てかかわりがもてる空間となる。

図7 保育室のお家

ウ 運動会の取組

A児の行う体操やダンスなどの曲を家庭でも聞けるようにカセットテープに録音して持ち帰るようにした。また、保護者に早めにプログラムを伝え、内容や順序をA児に知らせていただいた。（昨年度も実施）

昨年度もかけっこで負けそうになると泣いてしまった。また、種目も年長児になると増えることから、次のような支援を考えた。



図8 運動会のリレー

- リレーで抜かされてしまったときの様子を絵で描いてA児に示し、抜かされたときにどのような気持ちになるのか、またどうすればよいかということを考えさせた（図8）。

→ 教員が予想していた以上にリレーで抜かされることが嫌で、練習場面では途中で走ることをやめようとしてしまうこともあった。励まし、あきらめないよう働きかけた。

(5) 小学校との連携

就学に向けて、小学校の通常学級と障害児学級(あゆみ学級)でどのような活動をしているのか、A児、保護者、担任の三者で実際に小学校の見学を行った。就学に向けて少しでも小学校を知るよい機会となったと考えている。今後もA児がスムーズに小学校の生活を送ることができるよう小学校と連絡をとっていききたい。

5 研究結果と考察

今年度の教育的支援を考えていくに当たって、昨年度のA児の姿や対応の仕方の記録を基にA児とのかかわりを考えてきた。A児のありのままの姿を見つめる中で、生活しにくい環境がクラスの中にないか、また、同年齢の友達との集団参加が密である幼稚園において友達とかかわる機会をどのようにもち、どのように集団の中でかかわりをもたせるのか、教員自身模索をしながら進めてきた。A児にとっては、1日のスケジュールなどを言葉で説明するよりも図や絵で示した方が分かりやすかった。そうすることによって、気持ちの整理ができ、また楽しい気持ちをもちながら集団活動にスムーズに参加できるようだった。このように今回の研究では、視覚的な支援が大切なことが分かった。また、負けて悔しい気持ちに寄り添いながらも、少しでも気持ちの切り換えができるよう予告する方法をとってみたい、遊びのルールを工夫したりするなど様々な方途を工夫することも重要だと考える。結果的に運動会の取組の予告では気持ちの整理はできたものの、A児にとっては、実際に走ると負けたくないという気持ちが予想以上に大きかったようである。今後、同じような場面ではもう少し違った働きかけが必要である。

今回はクラス集団にA児の気持ちを知らせることもとても大切にしてきた。友達の気持ちを考えるよい機会となり、A児の姿から一人一人が本人の気持ちに寄り添おうとする様子が多くみられた。友達に支えられ、励まされてA児が気持ちを切り換えられることが増え、クラスの友達の中で育っていくことが感じられた。クラスの子どももA児の存在から学んだり、感じたりすることが多かったのではないかと思う。

今後、就学を控えているので、園での生活を小学校の生活にスムーズにつなげていけるよう一日一日を大切にA児が今、集団生活の中で何を身に付けていくことが必要なのかを考えていきたい。

6 今後の課題

今回の研究では、園の職員が指導案の書き方を見直し短期目標を立てていき、また遊びの場面ではA児に多面的にかかわり援助して共通理解をより一層深めることができた。今回の取組を今後に生かして、一人一人に応じた支援の在り方を今後も研究していきたい。また、A児や保護者が戸惑わず小学校へいかになめらかな接続をしていくのかを工夫することが必要であると考えている。

参考・引用文献

- (1) 朝日福祉ガイドブック 自閉症のひとたちへの援助システム TEACCHを日本でいかすには
朝日新聞厚生文化事業団 1999
- (2) 月刊『実践障害児教育』4月号 pp30～33 「困り感」に対応した環境整備 佐藤 暁
学習研究社 2005
- (3) 月刊『実践障害児教育』5月号 pp30～35 分かりやすい視覚支援のアイデア 佐藤 暁
学習研究社 2005